を知り得る譯である、それで露西亞のイヴノフ（Ivanov）教授は一九〇九年の露西亞學士院の報告に於て、此の辭書中から或る種の西夏語を撰び出して、發表したのであつたが、昨一九一六年には亞米利加に居る獨逸のラウフエル（Laufer）博士は、同じく此の書を基にして西夏語の性質を研究し、これが雲南地方に居る獼々、磨些等の單綴語族の言語と甚だ近いと考へて、此等の三者の頭字によつて Si-lo-mo group なる一團を區別し得ることを論ずるに至つた（通報第十七卷第一號）、イヴノフ博士の研究もその後大に進んだと聞いて居るが、今日迄にはなほその結果の發表されたものを見ない、此の如くにして今日では此の言語も充分とは行かぬ迄も或程度迄は研究せられて、その性質も論じ得るやうになり、またその記錄も漸次讀み破られやうとして居るのである。

三　西域諸國の人種

今の支那領トルキスタンの地にトルコ人の分布するより以前に、主として如何なる人種が住んで居たかといふことは、歷史上極めて重大なる問題で、また甚だ興味のある問題である、從がつて從來種々の推論が試みられたが、此等諸國の中少くとも或る數國に就いては、前項に述べた言語上の研究から、殆んど疑なき斷定を下し得ることになつた、此の研究の梗概は曾て本誌第三卷第三號に載せた「龜茲・于闐の研究」に於て述べて置いたから、こゝには省略することにする、さてこの研究の結果は自餘の西域諸國に於ける同樣の問題に關しても、また有力なる暗示を提供したものであるが、更に吾人は此の斷定と暗示とを基にして、獨り西域諸國のみならず、古來の大疑問たる漢民族の起原、漢民族の文化等の問題についても、相當强い根據から從來よりも更に進んだ推論を試み得る時代に